

価値倫理学論考

神 英 樹*

„Von der Wertethik“

Hideki JIN

要 旨

これはマックス・シェーラーの『実質的価値倫理学』^①の構造を明らかにするための論考である。

Synopse

Hier diskutiere ich über „die materiale Wertethik“ Max Schelers.

序 実質的価値倫理学

シェーラーの「実質的価値倫理学」の意図するところのものは、かのイマヌエル・カント (Immanuel Kant) の倫理学における「理性主義・形式主義」に対して、「実質的・価値主義」を確立しようとするものであると言えよう。

すなわち前者は「理性」という普遍的な能力が定立するところの「普遍妥当的な道德法則」によって、すなわち「普遍妥当的な立法形式」によって「人格」を規定することが要件とされたのに対して、後者では個性的な「人格」が認めるところの価値的なものに向って意志作用し行為することによってその価値を実現するものである。従ってそれらにおける「善」に関して言及するならば、前者では普遍性への意志が人格における「善」であるのに対して、後者では個性的価値の実現に向うことが「人格」にとっての「善」であると言ってよいだろう。

1. 価値の序列と様態

シェーラーは上の書においてまづ「価値」について論及する。

その「価値」には本質的に「高い・低い」の「序列」^②があるとして概略次のように挙げている。

- 1) 「価値は持続的であるほど高い」^③
- 2) 「価値は非分割的であるほど高い」^④
- 3) 「価値は基礎的であるほど高い」^⑤
- 4) 「価値は価値観における満足が深いほど高い」^⑥
- 5) 「価値はその価値観が一定の作用者の措定に相対的でないほど高い」^⑦

尚これらに関しては感性的なものから順に生命的・心的・精神的なものという段階として言われる。

以上のように「価値」についての「序列」についての一般的概念に対して次に挙げるのは「価値の様態」^⑧である。それらは「実質的な諸価値の体系」^⑨としてのものである。

- a. 「人格価値と物件価値」^⑩
- b. 「自己価値と他者価値」^⑪
- c. 「作用価値・機能価値・反作用価値」^⑫
- d. 「心術価値・行為価値・結果価値」^⑬
- e. 「志向価値と状態価値」^⑭
- f. 「基礎的価値・形式価値・関係価値」^⑮
- g. 「個別的価値と集合価値」^⑯
- h. 「自体的価値と従属価値」^⑰

以上のように「価値」の「様態」が言われるのであるが、「諸価値のあいだのア・プリオリな位階の様式の実例」^⑱として以下のことが強調される。第一は「快・不快」の「価値様態」^⑲については「感性的感受の機態や感覚的感情の状態に対応する」^⑳ものとして、機能や作用の特性の側から

*助教授 一般教科 哲学

特徴づけられる。第2に「生命的感受」の「価値様態」¹²¹については「感受の種類」¹²²が価値の様態を決めている。第三に「精神的価値」¹²³については感性的感受及び生命的感受に対する精神的感受の特性によって見出される¹²⁴。第四に「聖・不聖の価値様態」¹²⁵については「宗教的愛の作用」¹²⁶「信仰」¹²⁷「畏敬」¹²⁸「崇拜」¹²⁹などの反応的態度等が挙げられている。

さて以上のものに対して「人格」がいかに関わるか、あるいは意志作用し、担うところの主体たる「人格」はどのような構造をもつかが明らかにされなければならない。

2. 人格の本質

カントは「主観における二重性格」¹³⁰として「経験的性格」¹³¹と「叡知的性格」¹³²が構想されるとし、そこで人間の行為という結果に対する原因性としてはそれらの何れのものにも帰せられるが、「少なくとも叡知的なものにその原因性を帰してよい」¹³³と言われる。その場合の「人格」概念は「理性人格」である。

しかしこのような「叡知的なもの、理性的なもの」による「自律」はシェーラーに言わせるとそれは実は「理律 (logonomie)」¹³⁴であり、結局はそれは「理性」による「他律 (Heteronomie)」¹³⁵であるとされる。

そしてそのような事情に至ったのは、「カントの哲学が一方で数学的自然科学と他方ではイギリスの連想心理学をその一面的な出発点としており」¹³⁶、正にここに「カント哲学一般の基本的誤りが倫理学に関しても原則的にある」¹³⁷と言われるのである。

ともあれ以上の論に従えばカントの倫理学の原理は「理律」である。そしてそこでの「価値」は「普遍性への意志——善」である。

これに対してシェーラーの立場によるとこれは「人格」が「自己の外に向けられているもの」¹³⁸であり、それは「人格の自己価値への非志向性」¹³⁹であり、「人格価値が全ての他の価値の序列において上位にあると説く主張」¹⁴⁰からするならば、それは「反人格主義的倫理学の誤診」¹⁴¹であるとされる。

かくしてシェーラーの目指すことは人格価値の転換である。カントの形式的・普遍的なものへの志向性に対して、シェーラーは実質的・個別的な「価値」への志向性を説くのであり、これによってカントでは埋没していた倫理学上の「個性性」

「具体性」の原理を登場させようとするのである。すなわち「各人は彼がまさに純粋な人格であるのと同じ程度に個性的な存在であり、それゆえ他の人格から区別された唯一回的存在であり、それと類似的に彼の価値は個性的な唯一回の価値である。これに応じて各人格(個別人格あるいは総体人格)にとって普遍妥当な客観的善以外になおも個体妥当的であるが、同様に客観的であり原理的に洞察的な善が存在する」¹⁴²。そして「倫理的価値のすべての最後の担手はその存在のみならず、価値においても相異的であり不等式的である」¹⁴³

さてこのような概念は何故に承認されるであろうか。それは次のシェーラーの論によって可能である。この章の初めに触れたようにカントの「人格」の概念が結局は自然科学的・心理学的概念であるのに対して、シェーラーによるならば「自己意識」¹⁴⁴は「自己自身についての意識のうちに、自己を把握するすべての可能的なあり方(知的・意志的・感情的なあり方・愛し憎むあり方)が含まれていなければまだ人格ではない」¹⁴⁵

その意味で本質定義は次のようになる。「人格とは相異せる本質の諸作用の具体的なそれみずから本質的な存在統一であり、この統一性は自体的に(したがってわれわれにとってではなく)すべての本質的な作用差別(とくに外的と内的な知覚、外的と内的な意欲、外的と内的との感情と愛、憎、等々)に先行する。人格の存在はすべての本質的に相異せる作用を基礎づける」¹⁴⁶

そしてこの「作用」と「人格」については「その具体的作用のうちに全人格が入り込んでおり、作用によって全人格も変化する」¹⁴⁷と言われ、「人格が志向的作用の遂行のうちにのみ実存して生きることがその本質である」¹⁴⁸と言われる。

3. 人格と共同体

上述のような「人格」は他の「人格」とどのような関係があるか。あるいはそれは「共同体 (Gemeinschaft)」の中でどのような位置を占めるかが問われなければならない。

カントにあって「人格」は「人格性 (Persönlichkeit)」¹⁴⁹という一般的・抽象的概念に上昇することによってその個性性を捨象するものであった。つまりここでは「人格」の「普遍性」への同化が要求されるのみで、シェーラーの説くような個性的・具体的・価値的な人格の意義が浮び上っては来ない。つまりそこではシェーラーの指摘するよ

うに「普遍妥当的に善なるものを実現するために根源的な価値相異性を度外視することによって、普遍妥当的な道德法則を前にしての人格間の平等性という想定」⁵⁰が存するのであり、ここでは「人格間の実質的・相異的価値性は排除されており、同様にまたこの価値相異性の唯一の可能的な担い手、すなわち個性性も排除されている」⁵¹。

しかし本来人格と人格間の実質的価値性は相異的であり、そのことはそのような人格の個性性の事実からして当然言明されることであろう。

従ってシェーラーの「人格」と「共同体」とに關しては次のように言える。すなわち様々の異った価値の現実関係と諸人格が存在し、それぞれの人格が感得し、思惟し、志向し、価値的作用をすることによって人格間に倫理性が成立ち、このような様々の関係の複層的な集合として人格の共同体が成り立つ。

最後にその「価値」は「実質的」であり、相異的・個体的価値であるということから、そこでの価値作用が「時の要求」⁵²を充すものであることが指摘されねばならない。カントではこの要素が稀薄であったのであるが、シェーラーは正にこの点を重視したのであり、ここに時代の反映としての実存的倫理思想の証しを見るのである。

尚残された課題は「連帯性 (Solidarität)」⁵³「愛・憎」総体人格 (Gesamtperson)⁵⁴と「秘奥人格 (intime Person)」⁵⁵等の検討であろうが、これは論を改めたい。

注

- 1 Max Scheler, Der Formalismus in der Ethik und die materiale Wertethik, (以下 Form. と略記する。頁付は Francke Verlag Bern, sechste, durchgesehene Auflage 1980 による。)
- 2 Form. S. 104
- 3 Form. S. 108
- 4 Form. S. 110
- 5 Form. S. 112
- 6 Form. S. 113
- 7 Form. S. 114
- 8 Form. S. 117
- 9 a.a.O.
- 10 a.a.O.
- 11 Form. S. 118
- 12 a.a.O.
- 13 a.a.O.

- 14 Form. S. 119
- 15 a.a.O.
- 16 a.a.O.
- 17 Form. S. 120
- 18 Form. S. 122
- 19 a.a.O.
- 20 a.a.O.
- 21 Form. S. 123
- 22 a.a.O.
- 23 Form. S. 124
- 24 a.a.O.f.
- 25 Form. S. 125
- 26 Form. S. 126
- 27 a.a.O.
- 28 a.a.O.
- 29 a.a.O.
- 30 Immanuel Kant, Kritik der reinen Vernunft, B567
- 31 a.a.O.
- 32 a.a.O.
- 33 a.a.O.
- 34 Form. S. 372
- 35 a.a.O.
- 36 Form. S. 172
- 37 a.a.O.
- 38 Form. S.498
- 39 a.a.O.
- 40 a.a.O.
- 41 a.a.O.
- 42 Form. S. 499
- 43 a.a.O.
- 44 Form. S. 382
- 45 a.a.O.
- 46 a.a.O.f.
- 47 Form. S. 384
- 48 Form. S. 389
- 49 Immanuel Kant, Kritik der praktischen Vernunft, S. 155 (K. Vorländer 版による)
- 50 Form. S. 506
- 51 Form. S. 505
- 52 Form. S. 485
- 53 Form. S. 516
- 54 Form. S. 509
- 55 Form. S. 548

(昭和 57 年 11 月 30 日受理)

